

2013年11月

篠原 肇

船井情報科学振興財団 Funai Overseas Scholarship (FOS) 2013 年度採用で Cavendish Laboratory, University of Cambridge, Jesus College に在籍中の篠原肇です。滞在開始時から現在までを報告いたします。

#### 【夏期プログラム English for Academic Purpose (EAP) 】

正規タームが開始される前約1ヶ月間、Academic用の英語のコースに出席していた。当初はSpeakingに試験で1点分足りなかったため出席することになったはずが、いざ始まってみるとSpeakingについてはlとrの発音について少し言及されたものの、大半がWritingに関する指摘であり、語法や表現をひたすら直された。特に冠詞“the”については、かなり多くの指摘を受けたが、「語法は感覚だから慣れるしかない」と教育された。先生が「特にWritingはIELTSやTOEFLといった試験は、日常英語に少しだけacademicの味付けをただけの試験だから、実践では役に立たない。」と仰っており、試験と実践の壁を感じた。コースでは集団での授業に加え、Supervisionと呼ばれる教授による個別指導があり、的確かつ適切なアドバイスを何度もいただいた。コース終了後も英語の能力向上や較正のため頻繁に先生の下へ伺い、アドバイスをいただいている。本コースは英語力向上に加え、正規コース開講前に大学へ慣れることを軸としているため、多くのSocial Activityが行われた。ロンドンやオックスフォード(The other place)などへの小旅行、美術館訪問やパブ散策、立食パーティなどがあり主にヨーロッパ圏以外からの20ヶ国ほどの留学生との交流があった。最終的に私は夏期EAPのクラスのSocial Secretary(いわゆる懇親会幹事)に指名され、今後のsocial eventの運営を任されることとなった。Language Centreにはコース開始後も語学力の向上のため、授業期間開始後もスペイン語の中級コースに通っている。外国人ばかりの中で、外国語を学ぶことはとても新鮮である。在籍中は毎期いずれかの第2第3外国語のコースに通い、語学力の向上にも努めていこうと考えている。

#### 【研究生活】

私が所属するキャベンディッシュ研究所(ケンブリッジ大学物理学科の異名)はノーベル賞輩出数世界最多の機関であることもあり、世界中からディスカッションや見学に訪れる研究者や学生、業者が後を絶たない。あまりにも訪問研究員や訪問教授も含めたVisitorが多いため、Visitor用のシステムや実験スペースが用意されている。このため共同研究も非常に盛んである。訪問された世界中の著名な教授によるセミナーも頻繁に行われている。労働時間は基本的には9-10時から17-18時である。18時になると夜間体制になり、ドアがロックされる。土曜日・日曜日・祝日もドアはロックされている。タグをかざせば建物内に入ることは出来るが、基本的に定時外では人を見かけることはない。冬休みはクリスマス前から年明けまで約2週間半、イースターが1週間ほど、さらに夏には3週間ほど学生も教員も休暇を取るため年間約6週間は休みであり、日本に比べると非常に多い。しかし労働時間は短い、効率は良く、成果は日本の大学以上に上がっている。学生・教員・秘書や技術者などのスタッフ間のやり取りも非常にフラットであり、お互いにファーストネームで呼び合っている。身分によるヒエラルキーは感じない。私が所属しているQuantum Matter Groupは教員が約15人、学生が約20人、スタッフが数人の比較的大きめのグループである。学生は8割が博士学生で、修士学生が数人正式に登録されている。この他にもSummer StudentやProject Studentと呼ばれる一時的な学生がいる。総じて研究所としての研究設備によるハード面と人材によるソフト面の両面が充実している印象がある。

私は現在3つのプロジェクトを担当している。それぞれのプロジェクトは完全に独立しており研究背景が全く違うため、適応には苦勞している。メインで取り組んでいるものは電池材料であるが、他の研究のほうが上手く

いている。装置が混んでいる場合は意図的に週末の夜中に装置を予約し、測定を行うなどして装置の空いている時間を有効活用している。自転車で10分ほどの距離に位置する化学科や地学科の装置を利用することも多い。在籍期間中に行われる中間審査や博士論文、投稿へ向け実験結果は常にまとめるよう普段から心がけている。

上記の研究に加え **Winton Programme for the Physics of Sustainability** というキャベンディッシュ研究所に設置されたエネルギー系のプログラムに採用され、メンバーとして参加している[1]。ゲストや顧問が **TED.com** で講演している人が多数であり、各賞受賞者、世界的なエネルギー企業の取締役・役員、政府関係者も多数参加している。プログラム関係者で日本人は私のみであるため、日本ではどうなっているのかといった観点から意見を聞かれることが非常に多い。これを絶好の機会だと捉え、世界や日本のエネルギー問題についても少しずつではあるが徐々に勉強をしている。

## 【カレッジ生活】

少しでも調べたことがある方は周知のように、オックスフォード大学やケンブリッジ大学はカレッジ制を取っており、ケンブリッジ大学は31のカレッジの集合体である。ハリーポッターのモデルにもなったシステムである。学部生はカレッジで大半を過ごす、大学院生は主に学部・学科で活動を行う。それでも他学科の学生との交流や生活はカレッジによるものが多い。主に挙げられる交流はホール(hall)と呼ばれる晩餐会や各種イベント、部活やサークルに相当するソサエティがある。日本とは異なり学部生に加え、大学院生や場合によってはポスドクも課外活動への参加が一般的である。

ホールはガウンを着るフォーマルホールや大学院生専用のグラッドホール、イベントにちなんだホールなど何種類か存在する。学期やコースの終盤に行われるものは少し豪華であることが多い。カレッジにより頻度も様々である。私が所属する **Jesus College** ではほぼ毎日のようにホールが開催されている。ホールによってドレスコードが異なり、スーツからビジネスカジュアルからブラックタイまで様々である。学生は基本的にはフォーマルな場ではスーツの上にガウンの着用がしきたりとなっている。新学期の最初の2週間は新入生歓迎イベント **Fresher's Fortnight** が行われた。パブ散策やカクテルパーティ、ナイトクラブなどいろいろなイベントがあったが、本質的にはほぼ飲み会であった。

新歓行事以外にも、日本の大学の「オールラウンドイベントサークル」に入っているのではないかと感じるくらいカレッジでは毎週のようにイベントが行われている。最近行われたイベントではハロウィンホールが挙げられる。ハロウィンホールはドレスコードが**"Fancy Dress (仮装)"**であったため、仮装して先述のホールへ参加した(写真)。料理のメニューもハロウィン仕様で飾り付けも非常に凝っていた。ホール前日にはカボチャ削り大会が開催された。仮装に気合が入っている参加者が多く、意識の違いを感じた。今後クリスマスシーズンにはクリスマスホールが行われる。ドレスコードがブラックタイであるため、タキシードを着用する。また1年の試験期間が終わった6月には **May Ball** という派手なパーティが行われる。参加した際に今後のレポートに記述することにする。



ハウスメイトとハロウィンホールにて。

カレッジで行われる **Social Events** の他に特に目立つ特徴はカレッジ間のスポーツをはじめとした競技である。大学院生でもスポーツに取り組んでいる人は非常に多い。ハリーポッターのモデルであるように、各種目でカレッジ間の競争が行われている。日本において部活動などで真剣にスポーツに取り組んだことがある人にとって、カレッジのリーグはレベルが高いものではないが、リーグ表やルール、審判、ユニフォームなどはしっかりしており、競技によってはプレーオフ相当の大会もあり本格的である。イギリスでの人気スポーツはサッカー、ラグビー、クリケット、ローウィングである。これらのスポーツは競技人口も高く、カレッジリーグのレベルも比較的高い。対して、私が長く取り組んでいるバスケットボールはあまり人気無く、レベルもあまり高くはない。カレッジ内のリーグでもルールすらわかっていないと思われる明らかな初心者が半数ほどである。またバドミントンでは、私は部活で取り組んだことは全く無かったが、練習に参加していた際に、カレッジの代表チームに選出され、現在は他のカレッジとの試合に参加している。バスケットボール、バドミントン共に練習時間と試合時間が同じ長さ(共に週 1 時間ずつ)なので、学校で取り組んでいるスポーツとして日本の部活動により連想される「競技としてのスポーツ」というよりは、「形式は本格的なレジャー」という表現が合っているように感じる。試合や各種イベントは週末に行われることが多いため、週末はダブルヘッダーやトリプルヘッダーになることが多く、せわしない日々を送っている。

#### 【まとめ】

以上のように、ケンブリッジ大学には研究に加え遊びやスポーツなど様々なことに真剣に取り組む活動的な人材が多く、その人材が活躍できる素地を備えている環境であるという印象を受ける。質の高い教育・研究に加え、質の高い **social events** を体験したい人にとって、ケンブリッジ大学は良い選択肢といえる。また日本人の学生は非常に少なく珍しがられ、日本について聞かれる機会が多いため、世界から見た日本を垣間見ることができる。在籍中に出来るだけ多くの経験を積み、今後に生かしていければ、と考えている。

[1] Winton Programme for the Physics of Sustainability: <http://www.winton.phy.cam.ac.uk/directory/HShinohara>